



寺紋
ひいらぎ おもだか
柊 かこみ沢瀉
(通称 大関沢瀉)

大雄寺報

＝ 第 12 号 ＝

平成 25 年 1 月 1 日発行

発行所 黒羽山 大雄寺

〒 324-0233

栃木県大田原市黒羽田町 4 5 0

TEL 0287-54-0332

FAX 0287-54-0330

編集発行人：住職 倉澤 良裕

印刷所：タキザワ印刷



大雄寺 36 世重興徹巖良一大和尚 本葬



雅楽演奏会「横笛」



ドラマ『一休さん』ロケ中の 1 コマ



てらスクール「坐禅」

***** 目 次 *****

重興徹巖良一大和尚遷化 関連	2～3 頁
境内整備・入寺	4 頁
一休さんロケ・雅楽演奏会・雄禅会研修 ..	5 頁
新聞記事紹介	6 頁
大雄寺てらスクール	7 頁
「小瀧龍雄様と戦艦武蔵」	8～9 頁
平成 25 年の主な行事	10 頁

大雄寺三六世重興徹巖良一大和尚遷化



大雄寺三六世重興徹巖良一大和尚
(一九二五年～二〇二二年)

あゆみ

黒羽山大雄寺三六世徹巖良一大和尚が昨年（平成二十四年）四月十日、八七歳をもって遷化致しました。ここに生前のご交誼に対し深く感謝申し上げます。

徹巖良一大和尚は、昭和二十一年源昌寺二七世住職として二十年間、当山大雄寺三六世住職として昭和四十一年から平成三年の退董まで二十五年間を寺院の護持、檀信徒教化に尽力されました。ここに謹んでご報告申し上げます。

本葬は平成二十四年五月三十一日檀家葬にて執り行われました。

大雄寺三六世重興徹巖良一大和尚の足跡をつづり、偲んでみたいと存じます。

昭和21年6月～昭和41年5月 源昌寺住職
昭和28年12月～昭和41年5月 民生委員、児童委員
昭和41年6月～平成4年5月 大雄寺住職
昭和41年12月～昭和46年12月 保護司
昭和42年 鐘楼改修、鐘楼堂落慶
大雄寺経蔵・輪蔵栃木県文化財指定を受ける
昭和43年 参道改修、護持会設立
昭和44年2月 本堂、禅堂、庫裡、廻廊、総門、鐘楼、御霊屋 栃木県文化財指定を受ける
昭和45年 禅堂解体修理二力年継続事業開始
昭和46年8月 人権擁護委員委嘱、禅堂落慶
昭和46年8月～昭和60年3月 人権擁護委員
昭和47年 手動防災設備設置
昭和50年 本堂他四棟保存修理事業三力年継続事業開始
昭和52年 本堂落慶・江湖会厳修
昭和53年 童話幼稚園（明星館幼稚園）設立、参禅道場

昭和55年 認可
研修道場「月光館」新造
昭和56年 研修道場「月光館」落慶
昭和57年～平成15年 黒羽刑務所教誨師委嘱
経蔵保存修理二力年継続事業開始
昭和58年～平成15年 黒羽刑務所篤志面接委員委嘱
昭和58年 経蔵落慶
昭和58年4月～平成3年5月 栃木県第五教区長
昭和59年 白旗不動尊移築
昭和60年 新庫裡建設
昭和63年 新庫裡完成、庫裡保存修理事業三力年継続事業開始
平成元年 庫裡落慶、自動防火設備事業三力年継続事業開始
平成4年 退董
平成24年4月10日 遷化 八十七歳

表彰歴

昭和41年5月10日 民生委員 児童委員として厚生大臣賞表彰
昭和50年6月27日 人権擁護委員として人権擁護連合会长賞表彰
昭和52年9月22日

人権擁護委員として人権擁護連合会长賞表彰
昭和53年11月22日 人権擁護委員として人権擁護局長賞表彰
昭和60年3月1日 人権擁護委員として法務大臣賞表彰

昭和63年6月11日 教誨師として東京矯正管区長表彰
昭和63年12月14日 教誨師として黒羽刑務所長表彰
平成3年6月11日 教誨師として東京矯正管区長表彰
平成5年9月21日 教誨師として東京矯正管区長表彰
平成8年10月3日 篤志面接委員として篤志面接委員協議会会长賞表彰
平成11年6月11日 教誨師として教誨師連盟総裁賞表彰
平成12年9月6日 教誨師として法務大臣賞表彰
平成14年5月14日 藍綬褒章受章

謝辞（密葬）

遺族親族を代表として御礼申し上げます。

大雄寺三六世重興徹巖良一大和尚の密葬仮通夜、茶毘式にご参列御焼香いただき誠にありがとうございました。

徹巖良一大和尚は、三月十三日に日赤病院に入院し、肺炎治療を致して居り

ましたが、薬石効なく、四月十日午後三時二十分肺炎により、家族が見守る中静かに息を引き取りました。八七年の生涯でありました。

良一大和尚は、川田源昌寺を昭和二十一年に住職として迎えられて二十年間、その後昭和四十一年から当大雄寺住職に就任し、平成三年の退董までの二十五年間、加えて四十五年間の住職歴でありました。

平成三年住職の交代の後も東堂として、寺院の護持、布教化に尽力されました。

特に、大雄寺の伽藍保存に心血を注ぎ、昭和四〇年代五〇年代は、檀信徒とともに一丸となって保存修理を実施した時期でもありました。お陰をもちまして今に伝える五〇〇年の歴史を守り続けることができております。

徹巖良一大和尚の遺偈（生前にしたためた最期に残す言葉）を紹介いたします。

一生一死 八十七年 一夢之中
風清水平

『私の八十七年の人生は、夢のように過ぎ、今心は静かで、何の迷いもこだわりもなく穏やかである。』という言葉を残されました。

良一大和尚の心境は穏やかな顔にも表れています。

本日は、教区寺院のご随喜をいただき厳肅のうちに滞りなく密葬儀を勤めさせていただきます、また、役員様、ご詠歌

教室の皆様、読経会の皆様、お手伝いいただきました方々に感謝申し上げます。

なお、本葬は、来る五月三十日・三十一日を予定しています。檀家葬にて執り行う予定であります。

ご来山の上、御焼香賜りますようお願い申し上げます、遺族代表のお礼のご挨拶いたします。

平成二十四年四月十七日

密葬茶毘出棺 遺族謝辞

大雄寺住職 倉澤良裕

謝辞（本葬）

本日は、徹巖良一大和尚の本葬に際し、本寺成高寺篤中一誠老師に秉炬をお勤めいただき、またご尊宿老師、教区御寺院様を始め、檀信徒並びに各関係諸氏の皆様には、ご多忙のところ、かくも多数のご会葬を賜り御焼香頂き、且つご丁寧なる御弔慰、過分なるお志しを賜り誠に有難うございました。

顧みますれば、旧黒羽川田源昌寺へ戦後間もない昭和二十一年に住職となり二十年間在住し、その間本堂改築の偉業を成し遂げられました。

昭和四十一年に大雄寺三六代住職として迎えられ、平成三年までの二十五年間、住職として在籍し寺院の護持発展、布教化に尽くされました。

特に大雄寺での二十五年間は本堂、禅堂、庫裡、廻廊等の栃木県文化財指定に尽力され、その保存事業に費やし七堂伽藍全ての解体保存修理に着手され、貴重な文化遺産を保護することに

力を注がれ、全国でも珍しい茅屋根の禅寺として知られることとなり、室町時代の姿が今に残すことが出来ましたことは、大雄寺の中興の祖と認められるものと私もは思っております。

また、住職在籍中、明星館幼稚園を新設し、幼児教育にも力を注がれ、また、住職を退董し、東堂になっても黒羽羽務所教誨師として矯正教育にも尽力され、宗教家として本義を全うされました。

このような生き方を支えて下さった檀信徒の皆様、地域の皆様の温かいご支援とご協力を頂いたお陰でございます。

そのご芳情に対し父 良一大和尚になり替わり、厚く御礼申し上げます。大正、昭和、平成と八十七年の願いを生涯として全うすることができましたのも、み仏の御加護の賜と感謝していることと存じます。

私どもまだまだ若輩の身なれば、今後とも一層のご支援ご鞭撻を賜りますようお願い申しあげ謝辞とさせていただきます。

合掌

平成二十四年五月三十一日
遺弟（大雄寺住職） 倉澤良裕



境内整備

大雄寺では普段皆様にお使い頂いている墓地前駐車場と集古館（宝物館）横の東司（お手洗い）工事による境内整備を致しました。

●墓地前駐車場の縁石撤去による駐車場の拡張。

●宝物館横の道路整備による墓地から東司への近道。
これまで駐車場内でのUターンや墓地から東司までの回路によりご不便お掛けしておりましたが、本整備により緩和させて頂きましたので、ご使用宜しくお願い致します。



歩道 施工前



墓地前駐車場 施工前



歩道 施工後



墓地前駐車場 施工後

入寺

送行を迎えて

倉澤 文亮

約一年間の修行を終え、今年の二月に本山總持寺を送行し、大雄寺に戻って参りました。安居生活を振り返ればあつという間の一年間。しかし、体力的にも精神的にも辛かった時期は帰りたい衝動に何度も襲われました。その度に、送り出してくれた檀家様、家族、友人の顔が浮かび、力となって引きとめてくれました。何百年もほとんど変わることはない本山での修行生活は、父である現住職もやり通しており、すぐ隣では同安居が涙を流しながらもがんばっている、そんな姿に「自分にやれないことはない」そう自分に言い聞かせ、生活しておりました。

修行生活は自分の不甲斐なさ、弱さや甘えをたくさん教えてくれると同時に仏法、僧侶とは何かを深く考えるきっかけを与えてくれました。

「送行して、寺に戻ってからが本当の修行である」と老師はおっしゃっておりました。

大雄寺に戻った今、僧堂とは異なった厳しさや困難があります。しかし、僧堂の生活と変わることなく、真摯にひとつひとつ行じて参りたいと思います。



僧堂生活を終えて

梅木 伸治

平成二十一年十一月二日より平成二十四年五月十日まで、新潟市江南区にある大榮寺専門僧堂にて修行して参りました。

大榮寺では、大本山永平寺の日課・月課・年中行持に従って修行が行われています。朝起きてから就寝まで、その行いのひとつひとつに作法や規範があり、すべての行い決まりに従って、黙々と、精一杯つとめあげることが修行です。日々の修行の中心は坐禅ですが、生活のすべてが大切な修行です。掃除や炊事、食事をとること、雲水（修行僧）の一手一投足が、坐禅と同じく、自己の尊い修行として行じられています。

何事にも、実践が第一とされます。同じことを何度も繰り返し練習することにより「体に染み込ませる」と教えられるます。普段できないことが、本番で出来る訳はないのです。

修行のひとつに托鉢が行われます。読経しながら鈴を鳴らして家をめぐり、浄財を頂戴します。清らかな浄財を喜捨してくれた尊い心に感謝する心が生まれます。

僧堂で身に付けた作法と感謝の心をいつまでも忘れず精進してゆくつもりです。

これからも皆様の御指導、御鞭撻のほど、よろしくお願い致します。



鈴木福くん主演

ドラマ『一休さん』ロケが大雄寺で行われました

二〇二二年六月三十日に放送されたフジテレビ系列のスペシャルドラマ「一休さん」（鈴木福君主演）のロケが大雄寺にて行われました。室町建築の伽藍が製作者側の考えるアニメ「一休さん」の舞台「安国寺」のイメージに最も近いとされ、選出されました。

撮影は五月下旬の三日間、天気心配されましたが、本堂をはじめ廻廊など境内のほぼ全体を使用し、無事撮影が終了し、放送されました。大雄寺の伽藍がこのような素晴らしいドラマに使用され、多くの方々に足を運んで頂くきっかけとなった事は、今年遷化致しました徹巖良一大和尚をはじめ歴代住職、各檀家様のご先祖様による賜であります。私共も改めて護持していく気持ちを深めた次第であります。



第12回大雄寺定期演奏会

雅への誘い「雅楽演奏会」開催

牡丹開花の時期である五月十三日に恒例となりました大雄寺定期演奏会を開催いたしました。今年は横笛、正倉院復元楽器・笙、箏による雅楽演奏を中村香奈子氏、田島和枝氏、小林勝幸氏の三名により演奏頂きました。

当日は天候にも恵まれ、午前の部、午後の部共にたくさんの方にご来山いただきました。今年も満開に近い牡丹が咲く庭を背景に趣深い演奏が境内に響き、ゆつくりとした時間をお過ごし頂くことができました。



雄禅会 研修

「調息」

雄禅会会長 目面 靖浩

禅堂に入る。単に上がる。坐相を整える。止静の鐘の音が三つ聞こえる。その後には聞えるのは日常の営みの音。カラスの鳴き声、葉擦れのささやき、人の声、車の音、それもいつしか気にならなくなる

と、自分の呼吸、隣の人の呼吸、息の音が聞こえるようになる・・・。

十一月三日、新潟にある大榮寺に雄禅会の研修としておじゃましました。

堂長の五十嵐老師にご挨拶した後、今回の研修参加者に坐禅の心構えについてのお話がありました。大榮寺は、今年大雄寺に戻ってきた、梅木さんの修行したお寺です。若い修行僧の方々に禅の心を諭されている老師から直々にお話し頂ける光栄にあずかりました。

老師のお話は「息を整える」ということの大切さです。

●「いきは生き」息をすることは、命そのものです。

●座って「丹田」を落ち着ける。丹田で息を吸い込む。この「丹田呼吸法」が心の落ち着きを取り戻すことができます。

●心の落ち着きを取り戻すには、「静かな呼吸深い呼吸」の「丹田呼吸法」を継続して実践することです。

●息を調え、「平常心」を取り戻すと、身の回りの現象の受け止め方が変わります。

●息が乱れていたときには聞こえなかった音が聞こえ、見えなかった物が見えてきます。

と、語られました。

その後、一人一人にどのような取り組み方で、坐禅をしているか尋ねられました。その答えに応じて、坐禅の工夫について教えて頂いた後、大榮寺の禅堂で坐禅をさせて頂きました。

何年座り続けても、座り始めは心が乱れています。止静の鐘が鳴っても、あれこれ、日常の雑念が頭をよぎっていきます。それらを気にせず放っておく、次第に気持ちが落ち着いてきます。すると、息の音が意識の片隅に立ち上ってきます。心が落ち着いてくると、そのリズムも一定になります。ついには息の音も聞こえなくなると、放禅の鐘の音が日常に戻してくれま

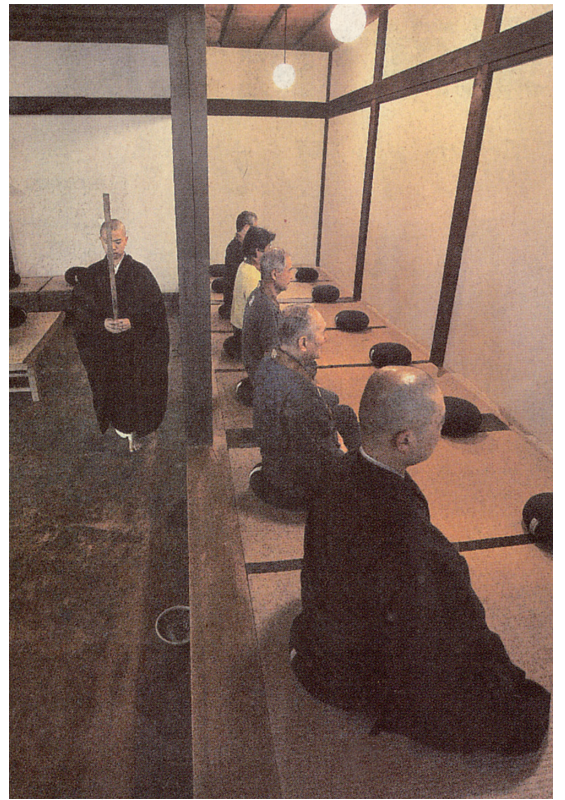
す。

秋の一日、坐禅の心構えについて、さらに一步を踏み出すことのできた貴重な研修となりました。



**神秘的音色
雅楽を堪能**
大雄寺で演奏会
【大田原】黒羽田町の
大雄寺（倉沢良裕
住職）で13日、雅楽演
奏会が開かれ、訪れた
人々を楽しませた。
大雄寺ではボタンが
見ごろとなるこの時季
に、琵琶や中国の胡
弓などの演奏会を行
っている。12回目とな
ることは「雅楽への
誘い」をテーマに、
箏、横笛、笙の雅
楽器による「春庭楽」
「盤渉調調子」など
の演目が奏でられ、訪
れた人は神秘的な音色
に聴き入っていた。
市内に住む60代の
主婦は「本堂で聴く
演奏会はひと味違って
良かった。幸せな気持
ちになりました」と
話した。

本堂で開かれた雅楽演奏会



3 大雄寺（大田原市黒羽田町）曹洞宗の禅寺。「日曜座禅会」が第2、第4日曜日に開かれる。事前に申し込みば禅堂で座禅を体験できる

下野新聞 平成二十四年六月十八日付より
「文学・歴史散歩 奥の細道を行く」より

大田原
福君主演の「一休さん」

大雄寺でドラマ撮影



本堂で行われた撮影の様子。1カットごとにモニター（中央下）でスタッフが確認していた。

「一休さん」の舞台「安国寺」のイメージに最も近いとされ同寺が選出された。

撮影は5月下旬の3日間、本堂をはじめ回廊など境内のほぼ全体を使用。座禅やまき割りのシーンでは、普段は静かな同寺に、細やかな指示やチェックを繰り返す声が響いていた。

ドラマ「一休さん」は2時間番組で全3話。室町時代を舞台に、とんちを利かせ知恵を絞る禅僧一休さんの活躍を描く。

下野新聞 平成24年6月2日付より

県内外の小学生 禅の世界を体験

大田原で「てらスクール」

利、黒羽田町の「大雄寺」18日、「第7回大雄寺で



本堂で般若心経を唱える子どもたち

「てらスクール」が開かれた。昨年まで親子参加の1日間だったが、こととらわれず、一生懸命座ること集中する」と座禅について説明。合掌の仕方や本堂の歩き方も指導した。同寺の日曜座禅会の会員で組織する雄禅会が企画し「スキスキとんち一休さん体験」と題して開催。県内外の小学生13人が参加し、座禅修行や作務の一環として境内の掃除を行ったほか、墓地での肝試しなどを楽しんだ。開講式で全員が般若心経を唱えた後、倉沢住職は「頭に浮かぶことにとらわれず、一生懸命座ること集中する」と座禅について説明。合掌の仕方や本堂の歩き方も指導した。同寺の日曜座禅会の会員で組織する雄禅会が企画し「スキスキとんち一休さん体験」と題して開催。県内外の小学生13人が参加し、座禅修行や作務の一環として境内の掃除を行ったほか、墓地での肝試しなどを楽しんだ。開講式で全員が般若心経を唱えた。宇都宮市から参加した御幸ヶ原小4年、宇賀神信長君（9）は「座禅は足がしびれたけど楽しい」と笑顔で話した。

大雄寺 てらスクール



し、楽しく学んでいただけだと思います。

子供たちの声

● しょうすの仕事を五時から振鈴を振り、みんなを起こしました。鈴振りがとても楽しかったです。

● 今日は初めての坐禅や茶道体験をやりました。初めてだったけど楽しく出来ました。

● きもだめしはぜんぜんこわくありませんでした。なぜかというとおねえさんだからです。おともだちができました。

● 初の坐禅できんちようした。作務で長い廊下をぞうきんで全速力でかけぬけました。



「スキスキとんち 一休さん体験」 寺スクールに参加して

金井 恵

今年で七年目となる雄禅会主催「大雄寺 てらスクール」を八月十八日に開講いたしました。今年は「スキスキとんち 一休さん体験」と題し、小学一年生から六年生までの合計十三名の子どもたちが、大雄寺において坐禅や作務などの禅生活を体験したほか、茶道体験や肝試し、スイカ割りなどのアクティビティを楽しみました。今年は何初めての一泊体験ということで、例年以上に子供たちの安全に気を配りましたが、食事作法をはじめ普段の生活における礼儀作法や日本文化、子供たち同士での助け合いについて直に体験

今年七回目の寺スクールは、初めての宿泊となるお寺の修行体験でした。私は、日曜坐禅の雄禅会の皆様と共にお手伝い参加をさせて頂きました。保護者の方々に送られて来た子供たちは、初めての顔負け。これからの体

験にワクワク、ドキドキといった面持ちでした。そんな中、開講式が始まり正座をして皆で般若心経を唱え、ご住職のお話を聞くうちに落ち着きを見せはじめ、静かに坐禅をすることも出来ました。作務の拭き掃除や掃き掃除なども嫌がらずに一生懸命でした。

一泊二日の日程の間には、自分の役割を果たす事や食事の作法を守る事、茶道の体験や肝試し、河原でのスイカ割りなど盛りだくさんの企画。初めてで分からない事でも真剣な眼差しで取り組み、楽しい時は、満面の笑顔でしゃぐ子供たちと過ごすうちに私は、お手伝いという立場よりも一緒に寝食を共にする仲間になったような気持ちでした。

早いスピード感で移り変わる今の時代ではあつても子供たちは、純粹で素直。そんな子供たちから私は、忘れかけていた新鮮な感覚を教えてもらったような気がしました。この大雄寺での貴重な体験が子供たち皆の心に残り、一隅の光となりますよう祈っています。

合掌



「小瀧龍雄様と戦艦武蔵」

倉澤 文亮

一九三八年、長崎には漁具（魚網等）に使う棕櫚^{しゅろ}で作られたすだれ状の目隠しが全面に張り巡らされている不気味な場所があった。長崎住民はその場所を見つめていると警察から即座に叱責を受け、中には逮捕される者もあった。いつしか付近の住民らは「目隠しの中ではただならぬことが起きている」と噂し、その中にあるものを「おぼけ」「魔物」と呼ぶようになった。

その目隠しの中で極秘に作られていたものが、大日本帝国海軍の戦艦「武蔵」である。巨額の国家予算を投じて作られた「武蔵」は、全長263.0m、全幅38.9m、排水量69,000トン、直径46cmの主砲を九門装備した、とてつもなく大きい戦艦であった。

私が小瀧龍雄さんに初めてお会いしたのは、月に一度開かれている大雄寺での「写真会」に参加した時であります。その落ち着いた雰囲気と礼儀正しい立ち振る舞いから感じ取れる厳しさ。そして朗らかでやさしい笑顔をさる魅力的な方と感じました。以前より小瀧さんが達筆である事は住職から聞いておりましてので、是非拝見して書をご教授願いたいと、かねがね思っておりまして。写真も終わり、茶話会中、私は小瀧さんが以前海兵であ

り、戦艦「武蔵」の乗組員であった事を知ることになりました。後日、私はその体験を伺いたく、失礼を承知で小瀧さんのお宅にお邪魔しました。残酷かつ過酷な戦争体験をお持ちの方の中には、その衝撃的な体験に口をつむぐ方が沢山いらっしゃると思います。私はそういった部分を心配していましたが、小瀧さんは快く引き受けお話し下さいました。

太平洋戦争終盤の昭和一九年、敗色が濃厚となっていた日本軍にとってフィリピンレイテ沖海戦は起死回生のための大切な戦いであった。同年十月、戦艦大和、武蔵、長門をはじめとする三十隻もの連合艦隊がブルネイに集結し、レイテ沖を目指した。

しかし、「武蔵」は出撃途中に第五派まで続く連合国軍による集中攻撃を受けることになる。何十発もの魚雷と爆弾を受け、満身創痍となった「武蔵」は最後まで武蔵を守りぬく事を命じられた多くの乗組員兵士達と共にフィリピンの海に沈んだのである。その巨大な戦艦に備えられた世界一の主砲は、海での戦いの主役が戦艦から航空機に代わっていた当時、力を発揮することはできなかった。乗組員二千三百九十九人中、生存者四百三十人。

『沈没直前の退去命令』

「自由行動をとれっ!!」との怒声に似た命令が加藤副長から発せられた。既に軍艦旗は早川信号兵の体に縛り付けられ、海に入っていた。猪口艦長は武蔵と運命を共にするため、加藤副長に遺書である手帳とペンを託し、既にその場所にはいなかった。私たちのいた甲板には攻撃による死骸や残骸があり、散々たるものであった。既に海水が甲板上に上がっているという事は、もう沈没直前であることを意味していた。号令後しばらくして、傾いた船から海に飛び降りる者がでてきた。船からは既に五十メートル程であろうか、海面が見えづらくなるほど離れていたのを覚えている。叫び声と共に「ポチャン」という着水音がしたのは、海兵が飛び降りてからしばらくしてからだった。飛び降りてから着水までの音の間隔により、海面までの距離を知った私はあまりの怖さに飛びこむことは出来ないと思った。そのまま船と一緒に沈むという選択をしようと考えていたのだ。

その時、「他を見るな。俺の背中だけを見ろ。俺の背中が見えなくなったら、目を閉じてでもいいから飛びこめ!!」と近くにいた阿部上等下士官が私に叫んだ。そう聞こえたと思った時には既に阿部上等下士官の姿はそこになかった。隣にいた萩原水兵長と私はその言葉通り、決死の思いで阿部上等下士官の後を追って飛びこむことになった。

飛びこんだはいいが、すぐに船の側面にぶつかり、そのまま滑り落ちるようになった。途中、何かが体にあたり体が切られていく痛みを感じた。後にその痛みは船の側面に厚くこびりついた牡蠣殻が私の体を引き裂く痛みだと知った。

海に落ちた後はその大きな戦艦の作りだす渦に巻き込まれていった。上も下も分からず、私は無我夢中でもがいた。どのくらいの時間もがいていただろうか。苦しみと格闘していると、不意に紐で頭を引っ張られたように海面にぽつと出たことに気付いた。「助かった」という思いが頭をよぎった。それも束の間、大きな波のうねりが私を襲った。既にうす暗くなった海の中、家の二階位の高さのうねりが私を飲み込んだ。そのうねりに必死に耐えながら泳いでいると、手のひら程の小さな板が私の元に流れてきた。すぐに椅子の破片らしきものも流れてきて、私はそれを腹部にあて、板を使いながら泳いだ。暗闇に目が慣れてくると、辺りには少しずつポツ、ポツと人の頭が見えてきた。そのうちに軍歌があちこちで聞こえはじめ、上弦の月の光に照らされながら大合唱へとなっていたのである。お互いを励まし合い、自らを鼓舞している様なその歌声は一面の星空に響いた。

遠くから丸太が近づいてくるのが見えた。海の表面に十五cmくらい溜まった重油を飲んでしまっていた私は、呼吸をしづらい苦しさで疲れ切り思うよ

うに動かない体で丸太に近づいた。丸太には十人ほどの海兵がしがみついていた、私もつかもうとするのだが、何度となく手を払われてしまった。その時、「小瀧か!？」との声が聞こえた。「はい」と返事をして、その方向をみると、丸太に乗っていた一人が偶然にも知り合いだった。すぐに助けてもらい、今にも沈みそうな丸太に何とかしがみつくことが出来た。

丸太にしがみついた後は眠気との戦いだった。重油の温かさからであろうか、強烈な眠気に襲われ、何度も丸太から手が離れ、溺れ、そしてまたしがみついた。「もう手を離さないぞ」と自分に言い聞かせては、溺れ、またしがみつく事を繰り返していた。海に飛び込んでから二時間程海をさまよい、私は駆逐艦に助けられた。

この話はお話頂いた内容のほんの一部に過ぎません。傷ついた体で過ごしたコレヒドールでの生活、内地に戻る途中、攻撃を受けたサントス丸からの生還、台湾で知った終戦。小瀧さんはその壮絶な体験をわずか十八歳の時に体験されました。その年齢はちょうど、今の高校三年生の年齢になります。

「今でも目を閉じれば坊主頭の戦友の顔がはっきりと浮かびますよ。」と小瀧さんは目を潤ませながらおっしゃっていました。

常に死を意識しながら過ごした小瀧さんから直に戦争体験を聞いたことは、私にとつてとても衝撃的で現実的

な話でした。その話はあらためて私に戦争を繰り返してはならないと強く訴えかけました。

私たちは国、人種、性別等あらゆる組織の中に存在しております。しかし、それらを越えて一人の人間であり、言わば地球に生ける動植物の一部であります。そういった組織に執着することなく、すべてと一体であることに気づき、他を我と思ひ生きていかなければならないと感じました。そう思い続け、生きていく事は難しい事かもしれませんが、争いはそういった一人ひとりの意識からなくす事ができるのではないのでしょうか。

小瀧さんは「私は生き残つてこの年まで生きている。生き延びることは私の使命でもあるんですよ。」と笑顔でおっしゃいました。この姿に私は過去を背負い「いま」を生きる小瀧さんを見ることができました。

最後に、ご協力を賜りました小瀧龍雄様に、改めてお礼の言葉を申し上げます。有難うございました。

また、戦争でお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りすると共に、最愛の肉親を亡くされましたご遺族の皆様、現在も尚戦争に苦しむ方々のご心中を察し、心から敬意と感謝を捧げます。

合掌



大雄寺の合掌観音の下には多くの方の写経が納経されております。小瀧さんも70歳になられたのを機に写経を始められ、すでに3,200巻余を納経されております。



檀家様の控室にもなっております草駄天の間の襖の書は小瀧龍雄さんによって書かれた書になります。

大雄寺プチ修行

お寺の生活を半日体験できます。
希望される方は「朝の修行」または「夕刻の修行」を選び、事前にお問い合わせください。

<朝の修行>

上山

6:30	坐禅の説明
6:45	暁天（坐禅）
7:15	朝課（読経）
7:35	作務（清掃）
8:05	拝観・回向之証授与

下山

<夕刻の修行>

上山

14:45	坐禅の説明
15:00	作務（清掃）
15:30	夜坐（坐禅）
16:00	晚課（読経）
16:20	拝観・回向之証授与
16:55	大梵鐘八声（鐘つき）

下山

日曜坐禅会

毎月第2・第4日曜日午前7時30分～

※初心者の方は事前にプチ修行体験が必要になります。

毎月2度、忙しい日常から抜け、禅堂でただ坐禅を組んでみませんか？

7:30	止静（坐禅開始）
8:15	作務（清掃）
8:30	下山または茶話会

写経会

毎月第1火曜日午後1時～

読経会

毎月第1火曜日午前9時～

ご詠歌教室

毎月第2・第4水曜日午後1時30分～

平成25年の主な行事

1月1日より	初詣
2月3日	節分会
3月9日	白旗不動尊大祭
3月17日～23日	春彼岸会
5月1日～	牡丹開花
5月8日	花祭り
5月12日	第13回牡丹演奏会
6月8日	大般若法会
8月13日～16日	盂蘭盆会
9月20日～26日	秋彼岸会
10月1日	大施食会
12月18日	観音祈願法会
12月31日	除夜法会

問合せ先

黒羽山 大雄寺

☎ 0287-54-0332

大雄寺ホームページ 詳細説明、一口法話、お知らせページ、掲示板など掲載

URL <http://www.daiouji.or.jp/>
E-mail ryoyu@daiouji.or.jp